

博物館におけるインタープリテーション導入のための 来館者のフェーズ分析と検討

宮田岳[†] 杉山岳弘[‡]

静岡大学大学院情報学研究科[†] 静岡大学情報学部[‡]

1 はじめに

本研究では博物館における解説活動（ガイド）に着目する。解説活動の手法の1つに自然解説でよく用いられるインタープリテーションというものがある[1]。このインタープリテーションを用いることで博物館の展示物に関する情報提供をより効果的に行えると考えている。そこで本研究は博物館への導入を目的として博物館に適した形のインタープリテーションを考えていく。また、インタープリテーションでは興味の度合いを基準にフェーズで分け、それぞれの特徴を考えることがガイドにおいて有効とされている点[2]から、本稿では来館者の興味の特色を5段階のフェーズに分けて分析する。そのために来館者へのアンケート調査を実施し、フェーズに分類したデータをもとに博物館におけるインタープリテーションについて検討する。

2 インタープリテーション

インタープリテーションとは、自然公園などの自然を対象とした「解説活動」を指す。1957年にフリーマン・チルデンがインタープリテーションの目的や原則を定義している。

インタープリーションの特徴として「現場で」行き、ビジターを「引き込み」ながら、その場所について「直接体験」を提供することがある。また、ただ単に対象の知識や情報を伝達するだけではなく、人の興味を刺激し啓発することを目的としている[1]。最近では、インタープリーションは自然を対象にするだけではなく、琵琶湖博物館の展示交流員の事例のように自然・歴史資料や文化財などをもつ多様な施設における解説活動にまで機能を広げている[3]。

2.1 インタープリーションに必要なこと

インタープリーションで着目すべきは来館者を主体的に捉えている点である。来館者自身が考え、意見を述べるという能動的な行動を促すことで、来館者の関心を高めることができる。

来館者を主体的に捉える点で重要になるのが、来館者がどのような特徴をもっているかを知ることである。先述したようにインタープリーションにはビジターを引き込むという特徴がある。ビジターを引き込むためにはビジターの社会的背景や興味の対象や度合いを知る必要がある。博物館においても来館者の属性や興味を知ることによって事前に来館者のフェーズに合わせたガイドの準備ができ、効果的なガイドを行うことができると考えられる。

3 来館者のフェーズ分析

そこで本研究では、まず博物館において来館者がどのような点に興味をもっているのかを知る必要があると考え、来館者の興味のフェーズを調査するために浜松市博物館でアンケート調査を実施した。

3.1 調査概要

アンケートの主な内容は、(1)性別・年齢・来館回数といった基本属性、(2)展示物に対して時代・様式・物という観点で分け、「とても強い関心がある」「強い関心がある」「興味はある」「どちらかというと興味はある」「興味はあまりない」の5段階で評価、(3)博物館への満足度、(4)学芸員や視聴覚機器でのガイドの必要性などについてである。調査は2010年12月11、12、23日の3日間実施し、浜松市博物館の来館者にアンケート形式で回答してもらい、3日間で192枚収集した。

3.2 来館者の基本属性

浜松市博物館の来館者の基本属性として年齢と同伴者について図1に示す。

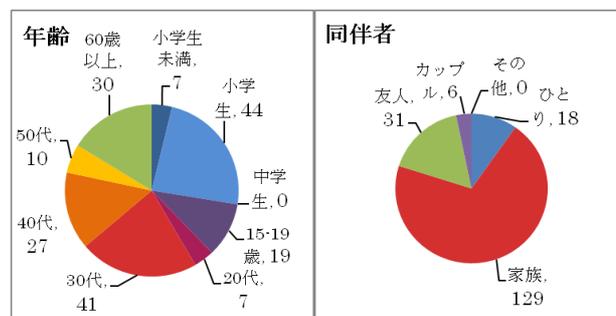


図1：来館者の基本属性

Analyzing phase of visitors and consideration to introduce interpreting in museums

[†] MIYATA, Gaku (gkmyt@sugilab.net)

[‡] SUGIYAMA Takahiro (sugi@inf.shizuoka.ac.jp)

Graduate School of Informatics, Shizuoka University([†])

Faculty of Informatics, Shizuoka University([‡])

図1(a)の年齢層から小学生が44人、それに続いて30代、60歳以上、40代の順に多い。また、図1(b)の来館者の同伴者の種類をみると家族で博物館に来たという人が129人と7割を占めている。続いて友人同士で博物館に来たという人が31人と家族に次いで多い。この点から浜松市博物館に来る人の属性が、30、40代と小学生の親子、60歳以上と小学生の祖父母と孫という組み合わせがほとんどを占めていることが言える。

3.3 来館者の世代による興味度

来館者の興味度をフェーズごとに分類し、分析を行った。興味度に関しては「時代」「様式」「物」という3つの観点を表1左のように詳細化し、それぞれを「フェーズ5：とても強い関心がある」から「フェーズ1：興味はあまりない」までの5つのフェーズで評価している。今回は小学生と30代のフェーズの表を抜粋して示す。

表1：興味度のフェーズ分類(小学生と30代)

	小学生					30代				
	フェーズ5	フェーズ4	フェーズ3	フェーズ2	フェーズ1	フェーズ5	フェーズ4	フェーズ3	フェーズ2	フェーズ1
時代										
原始	7	5	14	2	1	4	7	15	9	6
古代	5	7	10	5	1	2	5	19	11	4
中世	4	10	9	6	0	2	7	20	8	4
近世	9	4	11	1	2	3	9	17	9	3
近・現代	6	5	12	2	2	3	7	18	11	2
様式										
食生活	11	14	10	2	3	5	6	23	4	3
住居・環境	14	8	12	2	3	5	12	15	5	4
政治	8	8	15	3	5	3	8	20	7	3
産業	9	13	9	5	2	4	7	20	5	5
娯楽	12	6	16	5	0	4	5	22	6	4
ファッション・遊び	15	11	9	3	1	1	12	18	6	4
物										
化石	18	9	10	3	0	3	7	16	9	6
農具	17	8	9	2	2	3	8	18	6	6
古墳・遺跡	12	14	7	3	2	1	13	17	8	2
装飾品	10	14	11	1	2	3	10	18	6	4
土器	11	12	10	3	1	4	6	20	8	3
日用品・産業品	10	10	15	3	0	1	12	19	7	2

小学生については30代と比べても興味度の高いフェーズに分類される小学生が多い。さらに時代においては原始(縄文・弥生・古墳時代)と近世(安土・桃山・江戸時代)について興味度の高いフェーズに多くいる。この点は、蜷塚遺跡や徳川家康といった浜松市の特徴的な歴史がある時代に興味をもっていると考えられる。様式においては食生活と住居・環境、ファッション・遊びが高い。さらに物においては6つとも興味度が高く、小学生は視覚的に情報が得られる物に興味をもちやすいことが言える。また30代については小学生と比べて低いフェーズに分類される人が多い。

4 考察

分析から浜松市博物館においては子ども、大

人向けというガイドではなく親子向けにニーズがあると考えられる。

親子に着目して述べると親子は小学生と30、40代の組み合わせであり、展示物を鑑賞する際も一緒に回ることが多い。しかしながら、子どもと親では興味フェーズが異なるため、親子に同じ解説をしても両者が同じように興味を深めることは難しい。このような場合、インタープリテーションでは親子の特徴やニーズを考慮することで対応がとれる[1]。興味フェーズが高い子どもに主体をおいて親と子のコミュニケーションを促すようなガイドにすることで両者の興味度をあげることができる。

また、本研究では観点ごとに来館者をフェーズで分類している。これを用いると、例えば「化石」をテーマにして興味度が高い小学生向けのガイドプログラムを作成する場合、「化石」の興味度がフェーズ5の小学生は、様式の「住居・環境」のフェーズ5に多くいることがフェーズ分析からわかっているため、化石をテーマにガイドするときはその化石が昔どのような環境で住んでいたのかを重点的に解説するようなプログラムを考えられる。

このように、博物館において興味度をフェーズで分類することで来館者が興味をもちやすい話題を提供できるガイドプログラムを作成できる可能性がある。

5 まとめ

博物館における来館者の興味度に関する特徴を示した。今後、分析の結果をもとに博物館におけるインタープリテーションの導入にむけてさらなる分析と検討を進める。

謝辞

アンケート調査にあたり、浜松市博物館の学芸員の方々及び調査にご協力くださった皆様に感謝の意を表します。

参考文献

[1] キャサリン・レニエ, 他, 「インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック」, 小学館, 1994
 [2] 南正人, 他, 国土交通省総合政策局観光部(監修), 「実践講座インタープリテーション~楽しいツアーづくりのためのプログラム開発と伝えるテクニック~」, 財団法人日本交通社, 2002
 [3] 並木美砂子, 博物館等施設におけるインタープリター・コミュニケーターの役割, 環境思想・教育研究, Vol. 3, pp. 187-191, 2009